

現役教師ですが
“教育”について
こんなことを考えてます。

—これからの教育を担う人たちへ—



受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。

毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：「教師を辞めて、見えてきたもの」

今月のテーマは「教師を辞めて、見えてきたもの」。教師として頑張ることはもちろん大切ですが、より広い視野を得るためには、教師の目線から離れ、自分の生き方を見直す経験も必要かもしれません。伊藤先生はどのように実践したのでしょうか。

著 伊藤豊

千葉県八千代市出身。平成22年小学校教諭になる。現在、千葉県八千代市立村上北小学校教諭。

自分にとっての原点

東京都のとある下町、狭い倉庫のような家に5人兄弟の次男として産まれた。服の袖はボロボロで、満足にご飯を食べられない。物心ついた頃から周囲に劣等感を感じ、自信がない恥ずかしがり屋の少年で、いつかお腹いっぱいご飯を食べることを夢見ていた。

大人になり、配送部として配属された会社で営業に抜擢され、その3年後に営業成績が日本一になった。業績に満足することなく、脱サラして建築業を開業し、成功を収めた。これは私の父の生き立ちです。

私は、千葉県八千代市に4人兄弟の次男として産まれました。何でも話し合う明るい家庭で、親から様々な経験を聞かせてもらいました。小学生の頃に聞いて印象的だったのは、「本当の営業は相手に物を売り込むのではなく、買いたいと相手が自然に寄ってくるものだ」という話です。

それは、我慢や努力、経験の積み重ね、人間性が身体からにじみ出て、「この人から買いたい」と思わせてしまうことだと解釈しました。実際に私は、父の言葉以上に姿・背中から人としての在り方を教えてもらいました。これが自分にとっての原点で、自然と、

将来は父の建築業を継ぎたいと考えていました。

2年間の教員生活

ですが、大学の教職課程で小学校へ教育実習に行った際、小学校教師が天職だと直感し、教師になることにしました。そして平成22年、地元八千代市で新卒採用され、5年生の担任になりました。

当時は仕事に没頭し、夜中の12時近くまで働き、朝4時に学校に行くこともあり、「人と同じことをしてはだめだ」という父の教え通り、人がやっていない時に仕事をしました。教師1年目は遅くても朝6時には出勤し、一日の流れのシミュレーション・準備をしてから一日を過ごしました。

「1年で仕事を覚える」という目標をもち、がむしやりに頑張った結果、当時の校長先生から、「来年度、伊藤先生には学級を持ち上がってもらって、体育主任をお願いしようかな」というお言葉をいただきました。

嬉しかったのですが、同時に、「このままの自分でいいのかな」という違和感を覚えました。

2年目は、愛着いっぱいの学級で引き続き担任を

することができ、とても幸せでした。仕事に慣れ、早い時間に帰れるようにもなりました。

充実した日々でしたが、仕事に慣れてきたことで、何事も教師目線で考えてしまっている自分に気がきました。「この環境のままでは大切なものが見えなくなってしまう」という強い危機感ももちました。

後に、ふと読んだ新聞でこの時の心境を表してくれる言葉に出会いました。それは、「北の国から」で有名な脚本家の倉本聰さんが書いた社説にありました。

「山の上から下を眺めると下の景色がよく見える。でも、上の方から眺めて全体をわかった気になってはいけない。下に降りてみないと下の様子まではわからない。海拔ゼロの駿河湾から歩き始めて頂上を目指すことが本当の富士登山である。1合目からでもだめ。上の方からの発想ではなく、もっと下から物事を見ることで、本当の視野が広がる」

自分らしくあるために、父のような大きな人間になるために、私は教師を2年で退職する決断をしました。

海拔0mからのスタート

退職後、まずは教師という枠を自分の中から取り払うために、約1ヶ月、自分自身をリセットする期間を設けました。

その後、ただの一人の人間として社会と関わり、視野を広げたいという思いから、一人旅に出ました。たくさんのお会いがあり、医者、政治家、ハイパーレスキュー隊員、個人事業主、社長、ニート……多様な立場の方と交流をすることができました。

国際感覚を養うため、海外にも渡航をしました。「自分を知る」ということが一つのテーマだったため、小・中・高等学校、大学時代の友人に会い、当時の自分について話を聞くなど、自身を振り返る活動もしました。自身を見直すことで、さらに地に足が付き、視野が広がっていく感覚がしました。

1年間実践したことの全ては書ききれませんが、ゼロからスタートしたことで「当たり前」がどれだけありがたいことかを実感できました。

便利な物があるありがたさ、仕事をしてくれる人がいることのありがたさ、人の親切のありがたさ、今自分が生きていることのありがたさ、そして親への感謝……。これらに気付けた時、心の中の霧は晴れ、教師の仕事をすることに一点の曇りもなくなりました。そして、再び教師の道を登ることを決意し、教員採用試験を受け直しました。

背中で語れる人間を目指して

しかし、私の経験は評価されず、採用試験は2度不合格に。講師3年目で、やっと合格しました。

2度目の採用から4年が経ち……私の所には、学年・学級の枠を越えて、児童が話を聞いてほしいと話しかけてきます。教えてほしいと声をかけてきます。歩いていると低学年の児童が自然と手をつないできます。学校外でも不思議とこういったことがあります。

きっと子どもたちが私の姿から、何かを感じてきているのだと思います。「背中で語れる。人間性は言葉で伝えるのではなく、肌で伝わる」。そういう人間を目指して今も日々精進していますが、目指していた人間像に近づけているのかもしれない。

現在は33歳になり、育児休業中です。赤ちゃんは、昼夜関係なく3時間おきに目を覚ましてミルクを飲み、オムツを替えます。お風呂、離乳食、遊び、絵本の読み聞かせ、寝かしつけ、そして家事全般。やることがたくさんであつという間に1日は過ぎて行きます。教師の仕事よりもしんどいのではないかと感じることもあります。24時間繊細な命と向き合い続けた経験が、木の年輪のように身体に刻み込まれる感覚があります。

人としての幹が前よりも太くなった新しい自分で、子どもたちや保護者の方を支えていけることが今から楽しみです。

今月のまとめ

- 教師になったことに満足せず、自分がどんな人間や教師になるかを考えることが大切。
- 教師の視点だけではなく、様々な視点をもつことで、人として、教師としての大きな成長が得られる。